

直前東工大英語総合演習

【3 回目】



1)

(1) 2番目: a 5番目: b

- (2) 夜間に戦場の兵士たちが使う伝達方法をヒントにして、型押しの点を12から6に減らし、その点字を書くための鉄筆と文字の型枠も考案した。(65字)
- (3) 「全訳」の下線部⑥参照。 (4) alphabet
- (5) プライユが考案した点字法を使って読み書きをすること。(26字)

(1) 与えられた語群の中には整序問題で注意すべき単語が2つ含まれている。enough と someone である。enough は副詞として用いる場合、被修飾語を後置修飾する。ここでは imaginative の後ろに置き、その後に to 不定詞を続けることによって imaginative enough to … (…するのに十分に想像力のある) と構成できる。someone は something と同様に、形容詞を後に従えるので、someone imaginative enough to … とできる。the sighted person's は typographic alphabet につながり、これ全体が to abandon の目的語になる。by はカッコの前が would be found と受動態になっているので、by someone ～ として動作主を表すようにすればよい。残る only の扱いが難しい。本文の続きを読むと、音声記号やアルファベットを使った盲人用文字がいくつか考案されたが、ブライユによって考案されたアルファベットを用いない独創的な点字のおかげで、目の見えない人は読み書きの両方ができるようになった、とわかる。したがって、この only を使って「～によって初めて」の意味にすると推測し、only by ～ とすればよい。以上から、カッコ内は only by someone imaginative enough to abandon the sighted person's typographic alphabet となる。

- (2) プライユが考案しようとしたのは、目の見えない人が「読むこと」だけでなく、「書くこと」もできるやり方である。下線部②の後に続く第3段落から具体的な内容を読み取ろう。まず、「読むこと」に関しては、夜間に明かりをつけられない戦場で兵士が使用する、型押しの点による伝達方法を参考にしている。その際、目の見えない人が読みやすく、書きやすいものにするために、点の数を12から6に減らしたことがわかる。また、「書くこと」に関して、専用の鉄筆と型押し文字を書くための枠を考案したことも忘れずに含めること。

- [illegible]

○ the astonished principal: この形容詞 astonished (驚いた) は最初からそうであったのではなく、ブライユが present (提示) した結果としてそうなった状態を表す

もの。日本語にはない英語独特の使い方なので、訳出に工夫がいる。

○ substantially (実質的に) : 後に the same as を補って考えるとよい。

○ that still used = the system which is still used : 文頭の The system の重複を避けるために代名詞 that が使われている。still の後には which is を補って考えるとよい。このように「関係代名詞 + be 動詞」は省略されることが多い。

○ the blind = blind people : 'the + 形容詞' で「～の人々」と複数形の意味を表す。

- (4) ブライユの点字が数学記号と音符も表現できるというのは副次的なことであり、そもそもは、本文中で紹介されている他のやり方と同様に、目が見えない人が「文字」を読めるようにするためのもの。「文字」を意味する表現は本文中に、typographic alphabet, letters, his (= the) Roman letters, the Roman alphabet, Roman characters がある。空所の直前に定冠詞 the があるので alphabet を入れるのがよい。冠詞がなければ、mathematical symbols と musical notes に合わせて letters を入れることもできる。

- (5) この print は、直前にある活版印刷の発明者であるグーテンベルクについての言及からも、「印刷(物)」の意味であることがわかる。「発明の才に富んだフランスの少年(= ブライユ)が考案した印刷物」とは「ブライユ式点字」のことであるから、下線部は「ブライユ式点字への道をたどる」つまり「ブライユ式点字を使って読み書きをする」ということ。ちなみに、本文冒頭に「目の見えない人を書き言葉の世界に慣れ親しませるためには彼らに読み書きの両方に使える方法を与える必要がある」という記述があるが、ブライユ式点字がその「方法」だということ。

全訳

目の見えない人を書き言葉の世界に慣れ親しませるためには、彼らは読み書きの両方に使える方法を与えられなくてはならなかった。その最終的な解決は、目の見える人が使う活字体文字を捨て去るだけの想像力に富む人によって初めて見出されることになった。英国人 T. M. ルーカスは、新しい速記法にならって、型押しした音声記号一式を考案し、彼はそれを使って 1837 年に新約聖書を書き換えた。そして、当時、聖書の預言に関する著述で最も有名だったジェームズ・H. フレール (1779-1866) が、その後、音声記号を型押しする廉価な方法を考案した。彼は「行戻り」——行を交互に、ある行は左から右へ進み、次の行は文字を右から左へと逆にして印刷する——という重要な工夫をも考案したが、これは読む人の指が行から行へ、速く正確に移動できるようにするためだった。

指で字を読むという問題は最終的に、パリにあったアユイの王立パリ盲学校に入学していた、ルイ・ブライユ (1809-1852) という 16 歳の発明の才に富んだ目の見えない少年によって解決されることになった。ブライユは 3 歳の時、父親の革工房で誤ってナイフが刺さって片目の視力を失った。その後、交感性眼炎によって彼は全盲になった。このハンディにもかかわらず、彼は名人級のチェリスト兼オルガニストになり、たった 10 歳にして王立パリ盲学校へ入るための奨学金を授けられた。アユイはすでに目の見えない子供たちに、自分で考案した型押しアルファベットの読み方を教えることに、十分とは言えないまでも、成功していた。ブライユが盲学校に入学した時、アユイのやり方で型押しされた本はまだたった 14 冊しかなく、それもほとんど使われていなかった。型押しアルファベットは読めるものでは

ないと感じたブライユは、目の見えない人が、読むだけでなく書くこともできる方法を考案しようと決心した。

若くて頭の回転の速かったブライユは、その手がかりを、教室の中ではなく、交信する必要があっても明かりを点けるわけにはいかないので目の見えない人と同じ問題を抱えていた、夜間の戦場の兵士たちのために提案された方法の中に見出した。フランスの砲兵将校シャルル・バルビエ大尉によって作られた「夜間筆記法」は、12の盛り上がった点から成る小さな格子を使うものだった。バルビエはこれらの点を、さまざまな具合にグループ化したり結合させたりして、文字と音声を表した。バルビエのやり方の欠点は、その12の点から成る「升文字」で、これは目の見える人にとってはイメージを思い浮かべるのが容易だったが、指で読むには不便で、書くためにはまったく非実用的だった。ブライユはこれらの欠点を見て取ったが、その可能性に希望を見出した。彼は「升文字」の型押しした点の数を12から6に減らし、次に文字を書くための簡素な鉄筆と文字枠を考案した。⑤ 16歳のブライユが1825年に王立パリ盲学校の校長に見せて驚かれたそのシステムは、今日もなお目の見えない人たちに使われているものと実質的に変わりはない。ブライユの32ページの小冊子（王立パリ盲学校から、型押しアルファベットを使う、そこで以前から使われていた方法で1829年に出版された）を読むと、6つの点を使う彼のやり方が、文字だけでなく、数学の記号や音符にも使えることがわかる。彼はその中で、目の見えない人が点字で文字を書けるようにする鉄筆と文字枠についても説明している。

ブライユのやり方は目新しすぎた（また単純すぎた）ので、すぐには取り入れられなかった。だが四半世紀も経たないうちに、それは王立パリ盲学校で取り入れられ、次に1878年にパリで開かれた国際会議で取り入れられ、1932年には英語圏向けに体系化された。1892年には、イリノイ盲学校でブライユ式点訳機が発明された。他の点字システムはこれまでいくつも試されてきた。1840年に自身も22歳で失明したウィリアム・ムーンが、年齢がいつてから失明した人のための点字システムを考案し、そのムーンの点字は一部で使われ続けている。だが、ブライユは目の見えない人たちのグーテンベルクだった。西洋社会の目の見えない人たちは今でも、この発明の才に富んだフランスの少年によって考案された印刷物に続く道をたどっている。20世紀には録音技術が「話す本」——これはエジソンが蓄音機を発明した時の彼の目的の1つだった——を可能にした。とはいえ、ブライユの発明に取って代わる満足のいくものは、これまで1つも見つかっていない。

注

ℓ. 5 ◇ shorthand *n.* 「速記」

◇ embossed *adj.* 「型押しした」

◇ phonetic *adj.* 「音声の」 phonetic symbol 「音声記号」の意。

ℓ. 6 ◇ transcribe ～ *vt.* 「～を翻訳する〔書き換える〕」

ℓ. 7 ◇ prophecy *n.* 「預言」

ℓ. 8 ◇ crucial *adj.* 「重要な」

ℓ. 9 ◇ alternately *adv.* 「交互に」

ℓ. 12 ◇ ingenious *adj.* 「発明の才に富む；独創的な」

ℓ. 16 ◇ cellist *n.* 「チェロ奏者」

ℓ. 17 ◇ meager *adj.* 「貧弱な；不十分な」

ℓ. 19 ◇ scheme *n.* 「仕組み；計画」

ℓ. 22 ◇ alert *adj.* 「機敏な」

ℓ. 25 ◇ artillery officer 「砲兵将校」

◇ grill (= grille) *n.* 「格子」

ℓ. 34 ◇ musical note 「音符」

ℓ. 46 ◇ phonograph *n.* 「蓄音機」

【配点】 40 点

(1) 6 点 (完答) (2) 12 点 (3) 8 点

(4) 4 点 (5) 10 点

【配点の目安】

(2) ①夜間に戦場の兵士たちが使う伝達方法をヒントにして 5 点

②型押しの点を (12 から 6 に) 減らし 3 点

③点字を書くための鉄筆と型枠を考案した 4 点

(3) 以下のように 2 つの区分を設定する。単語レベルのミス・脱落は 1 件につき 1 点減点とし、区分を超えて減点はしない。

① The system that the sixteen-year-old Braille presented to the astonished principal of the Haüy Institute in 1825 (4 点)

The system と that ~ in 1825 の修飾・非修飾関係を訳出していないもの - 2 点
astonished の訳が不自然なもの - 1 点

② was substantially that still used by the blind today (4 点)

that を the system と解釈できていないもの - 2 点

that と used by the blind today の修飾・非修飾関係を訳出していないもの - 2 点

(5) ①ブライユが考案した点字法を使って (7 点)

print を「ブライユ式点字法」と解釈できていないもの - 7 点

②読み書きをすること (3 点)

【2】

解答

(1) Language and the capacity to walk on two feet would also be on the list.

(2) 「全訳」の下線部⑥参照。

(3) But no matter how it began, by fourteen thousand years ago dogs played an integral role in human life and culture.

(4) 「全訳」の下線部④参照。

(5) ① d ② a ③ c

(6) a (T) b (T) c (T) d (F) e (T)

f (F) g (F) h (T) i (F) j (F)

全訳

牡蠣は見事なものだったが、同席の客はなおいっそう素晴らしかった。私はパリの小さな

ビストロで新鮮な貝の皿を前に座っており、海の味を楽しんでいた。だが、その日、より強く記憶に残ったのはレストランのもう1人の客についての方だった。私の隣のテーブルには寸分の間もなくコーディネートされた装いのフランス人女性が座っていた。彼女のバッグ、スカート、靴下はすっかり調和がとれている——とは言わないまでも、人目を惹くには十分だった。彼女の食事の連れは右手に座っており、それはトイプードルだったのだが、椅子の上でテーブルの上のボールから水を飲んでいて。彼の食事（チキンだったと思うが）のかけらが皿のそばにこぼれており、飼い主のパンくずと混ざっていた。

犬は世界中の多くの人の生活で重要な役割を果たしている。私は1カ月に及ぶアジアとアフリカでの調査旅行から帰る途中にごく短期間パリに立ち寄っていたのだった。時差だけだったのかもしれないが、この出来事についての私の記憶は超現実的だと言われるだけのものになりかねない。旅行の間に私はボルネオのある地域で時を過ごしたが、そこは人々が犬を食べるところで、私自身少なくとも1回それと知らずに犬を食べたことがある。私はまたマレー半島のイスラム教の地域も訪れたが、そこでは信心深い人々が宗教上の信念のために、犬に触れることさえしないのである。さらに、私は中央アフリカで過ごしたが、そこで私は地元の猟師たちが自分たちの小型でおとなしい狩猟犬であるバセニーと働くのを見た。バセニーは、自力で生きているが、残飯と引き換えに森林の中まで猟師について行き、猟師が獲物を捕まえるのを手伝う犬である。アメリカ合衆国では、多くの人々が犬を家族の一員として扱い、高額の治療費を支払い、犬が死ぬと喪に服するのである。サンフランシスコの我が家の近くの浜辺に座していると、誰かが自分の愛犬の口にキスするのを目にしないで1時間を過ごすのが難しいほどだ。パリのあの女性が自分の犬と食事をともにしているのを見たことで、我々とこの動物たちがまさにどのように結び付いているかが強くわかった。

我々の持つ犬との密接な関係は、仲間としてであれ、労働力としてであれ、食事をともにする同席者としてであれ、食糧源としてであれ、我々にとって驚くべきものではない。犬は人間の歴史の中で特別な役割を演じている。人間の進化に影響を与えた事柄の「上位ランキング」を作成するとしたら、確実に狩猟と加熱調理がランクインするだろう。言語と2足歩行能力もそのリストに載るだろう。だが、我々の種の重要な歴史的出来事の中で中心に位置するのは家畜化・栽培化であり、犬は我々の祖先が飼い馴らし栽培した数々の動植物の筆頭だった。

動植物を家畜化・栽培化する能力は、人間的であると我々が見なすものの大部分の基礎となっている。家畜化・栽培化のない世界を想像するためには、私が数年間一緒に仕事をしたことのある中央アフリカに暮らすバカ族とバコーリ族（いわゆるピグミー）や南米のアチェ族のようなまだに狩猟採集生活を行っている地球上の数十の人間集団の1つと時を過ごさねばならないだろう。このような人間集団には、パンやコメやチーズがない。農業がないので、収穫と植え付けの成功を神に感謝する巡礼の旅やそれに関連する祭礼を含む、地球上の主要な伝統である多くの儀式的行事がまったく存在せず、ラマダンや復活祭や感謝祭のような休日もない。羊毛も綿もなく、野生の樹皮や草から作られた布地と狩猟された動物の皮があるだけだ。

これらの狩猟採集民には複雑な歴史があり、彼らの多くが採食生活に戻る前のある時点で

ある種の農業に従事して生活していた。だが、彼らは我々に、広い範囲に及ぶ家畜化・栽培化の到来以前の我々の祖先の暮らしがどのようなものであったかについて興味深い手がかりを与えてくれる。狩猟採集民に共通する特色の中に小規模の人口と遊牧民的生活様式がある。これらの特色は、この人々に微生物のレパトリーを低レベルに保つことに、重要な効果がある。

家畜化・栽培化への最初の人間の進出は、オオカミを我々が今日知っている犬に変えることによって始まった。⑥考古学的証拠と DNA 鑑定から、早くも 3 万年前には中東と東アジアの住民がハイロオオカミの家畜化を始め、彼らを食用と毛皮用に利用するばかりか番犬や労働犬に変えるようになったということがわかる。犬の家畜化の初期の歴史はいまだにはっきりしない。1つの仮説は、オオカミが人間について行き、人間の獲物の腐肉をあさり、やがて人間に依存するようになって、これがオオカミの後の家畜化のお膳立てとなる従属関係となったというものだ。だが、それがどのように始まったにしても、1万4千年前までには犬は人間の生活と文化になくてはならない役割を果たすようになった。イスラエルのいくつかの遺跡発掘現場には、人間と犬と一緒に埋葬されていさえた。こういった初期の犬は、私が一緒に仕事をした中央アフリカの猟師たちに好まれたおとなしい猟犬である、現代で言うバセニー犬に似ていたのだろう。

我々が何か他のものを家畜化・栽培化する1万2千年前頃に起こった犬の家畜化は続いて起こることになるものの初期の前触れだった。1万年～1万2千年前頃に、家畜化・栽培化革命が本格的に起こり、ヒツジとライ麦から始まって、その後さまざまな他の動植物が続いた。

家畜化・栽培化革命の結果と機会は重大なものだった。家畜化・栽培化より前には、人間の個体数は野生環境で入手可能な食物によって限られていた。④野生動物は移住するが、こうした野生動物を狩猟することに依存していた我々の祖先も同じことをするように強いられた。その土地の生息環境にある野生の果実と他の植物性食物は散在していたので、季節ごとに移動を強いられた。野生環境は、いくつかの軽微な例外はあったが、大規模人口を支える能力を欠いていた。結果として、人口規模は小さく、おそらく1つの集団に僅か50人から100人で、また流動的であった。

5千年～1万年前頃に家畜化・栽培化が本当に始めると、これはすべて変わった。栽培植物と家畜動物を組み合わせ、人間は1年中持続するカロリー源を持つ能力を得た。農業（つまり、植物の栽培化）は人間集団が1か所にとどまることを可能にし、家畜動物だけを持つ人間集団（家畜の群れの餌を見つけるのに移動することを必要とする）と同様に、狩猟採集民をも特徴付ける絶え間ない移動をしないで済むことを可能にした。定住性の生活様式と食料剰余の能力は住民数増加の可能性を急激に高め、最初の町と都市の成立につながった。より大きな人口規模、人間の集団の定住、そして家畜の個体数増加という特別な組み合わせが、人間と病原菌の関係を変質させるのに中心的な役割を演じることになるのだった。

【配点】 60 点

- (1) 6 点 (2) 10 点 (3) 10 点 (4) 8 点
(5) 6 点 (各 2 点) (6) 20 点 (各 2 点)

【配点の目安】

- (1) 以下のように2つの区分を設定する。単語レベルのミス・脱落は1件につき1点減点とし、区分を超えて減点はしない。
- ① 言語能力と2本足で歩くことのできる能力 (3点)
 - ② ～もまたそのリストに載るだろう。(3点)
- 「～もまた」(also ; too ; as well) の脱落 - 1点
- would [might] を用いていないもの - 1点
- (2) suggest の目的語の that 節が文末まで続いていることを理解していないものは全体から6点減点。その上で、以下のように4つの区分を設定する。単語レベルのミス・脱落は1件につき1点減点とし、区分を超えて減点はしない。
- ① Archaeological and DNA evidence suggests (that …) (2点)
 - ② populations in the Middle East and east Asia began domesticating gray wolves (3点)
 - ③ as early as thirty thousand years ago (2点)
- この部分が began にかかっていることがわかっていないもの - 2点
- ④ ,turning them into guard dogs and work animals as well as using them for food and fur (3点)
- A as well as B が正しく訳に反映されていないもの - 3点
- (3) 以下の3つの区分に分けて採点する。単語レベルのミス・脱落は1件につき1点減点とし、区分を超えて減点はしない。
- ① だが、それがどのように始まったにしても (3点)
 - ② 今から1万4千年前までには (2点)
 - ③ 犬は人間の生活と文化になくてはならない役割を果たすようになった。(5点)
- (4) which ～ to do the same が前節 Wild animals migrate を先行詞とする非制限用法の関係詞節であることを理解していないものは採点の対象としない。以上の前提をクリアしているものについて、単語レベルのミス・脱落1件につき1点減点とする。



会員番号

氏 名